5 ダークツーリズムという旅のあり方

井出 明
IDE Akira
金沢大学国際基幹教育院／教授

世界的に増加している「ダークツーリズム」という新しい旅の形をご存知だろうか。影の記憶から地域に接近する英国発祥の手法であるが、日本では少々馴染みにくいところがある。ここではその核心的価値について考えてみたい。

ダークツーリズムの定義と射程

ダークツーリズムとは、災害や戦争を始めとする悲劇の記憶を巡る旅である。元々は1990年代後半にイギリスで研究が始まり、2000年代になって瞬く間に世界中にこの概念が拡大した。

この新しい観光の概念が広まった背景には、20世紀後半にヨーロッパの思想界を席巻したポストモダニズムの影響がある。近代ヨーロッパが重視した価値規範は、理性万能・科学技術の重視・大量生産および大量消費社会などであるが、その行き着いた先は核兵器の使用を伴う二つの世界大戦や大規模な環境破壊といった悲劇的な社会であった。それ故、第二次世界大戦後のヨーロッパの知識人は、従来型の近代（Modern）の概念を批判し、新しい価値規範を生み出そうとした。この大規模なうねりがポストモダンと呼ばれる思想運動であり、これは哲学にとどまらず、法律学や建築学と言った分野にも波及した。ダークツーリズムが生まれた経緯も、ポストモダンの動きに呼応しており、この新しい旅の形態は、近代の社会システムがもたらした悲劇の現場を考察の対象としている。

読者諸氏の中には、地震や台風と言った自然災害は、近代の価値規範となんの関係もなく、ダークツーリズムの対象にならないと思われる方もいるかもしれない。実は、2000年前の地震などの厄災と近代のそれは被害の現れ方が全く異なっている。例えば、関東大震災では朝鮮人虐殺が生じているが、これは帝国主義政策によって広がった大日本帝国の版図の中で、経済的に貧しい地域であった朝鮮半島からの労働移民が関東地方に移り住み、そこに漂っていた民族間の疑心暗鬼が地震によって表出し、大量虐殺という形となって現れた。阪神・淡路大震災では神戸市長田区に甚大な被害が生じているが、これも朝鮮半島からの労働移民が形成した街並みが、リノベーションされないまま20世紀末まで残り、そこに地震というインパクトが働いたことで、大量死という悲劇が生まれたと考えることができる。さらに、東日本大震災では、原発事故が生じており、これはとりも直さず、自然災害が科学文明の申し子である原発の暴走をもたらしたと考えられる。このように、自然災害については震度やマグニチュードと言った、数値的な尺度はあまり重要な指標ではなく、具体的に社会にどのような被害が発生したのかという点がダークツーリズムとしては意味を持つ。

写真1　横網町公園にある関東大震災における朝鮮人慰霊碑（東京都墨田区）

写真2　震災復興に積極的に関わった坂茂設計によるカトリックたかとり教会礼拝堂（神戸市長田区）

以上を踏まえると、「戦争のダークツーリズム」「災害のダークツーリズム」などと分けることもあまり意味がないことが分かってくる。朝鮮人虐殺は、日本の帝国主義政策の中で、日露戦争が起こり、朝鮮半島が併合されて労働力移動が生じたあとで、地震が起きたことが引き金になっており、単に「地震で朝鮮人が死んだ」というわけではない。ダークツーリズムが、近代社会の持つ影を俯瞰的に捉える方法論として、非常に強力な学問的ツールだとされるのは、こうしたマクロ的な視座から、社会や歴史そして地域を捉えられるからである。

ダークツーリズムが、ポストモダンの立場から近代を批判的に捉える営為とすれば、必然的に関ケ原のような前近代の戦地は、概念の射程から外れることになる。ただ、古代の遺跡であっても、近現代に通じる問題意識があれば、その場はダークツーリズムの対象として、認識される。例えば、エルサレムの「嘆きの壁」は、2000年ほど前の遺跡であるが、ユダヤ人とパレスチナの対立という極めて現代的な問題提起を含むので、当然ダークツーリストの訪問先の一つとなる。

日本に広まらない理由

このように、世界的には非常に深く受け入れられたダークツーリズムであるが、日本においてはそれほど大きな潮流とならないまま、現在に至っている。欧米において、共通に認められている観光のこの新しい形態は、なぜ日本では広がらないのであろうか。

この点、欧米との文明構造の違いは、重要な分析の視点と言えよう。具体的には、ヨーロッパのキリスト教文明はダークツーリズムの考え方と深い親和性を持っていた。

キリスト教文明では、「天国と地獄」「天使と悪魔」「天と地」「生と死」そして「光と影」といった二つの背反する概念が、教会の中に混在している。これはミケランジェロやラファエロの宗教画を見ても、一目瞭然であろう。それ故、キリスト教文明圏では天国を語る時は地獄が、そして天使について語る時は悪魔がセットで言及された。換言すれば、明るい事項だけを取り出して語ることは、ヨーロッパにおい

写真3　カラカラ浴場（イタリア・ローマ）

てはかえって不自然という誹りを免れない。

栄光の記憶や成功の歴史を語るときには、地域の負の側面にも同様に言及されることが常であり、ストーリーのダークサイドに触れることに、特に違和感もないというのが、ヨーロッパ出身者の素朴な感覚であろう。

さらに、ヨーロッパには、「メメント・モリ（死を想え）」と言われる独特の死生観があり、古代より、生活の中で死について考えることが当然とされていた。

また、ヨーロッパの建造物が石でできているという事情もダークツーリズムの成立には有利に働いた。例えば、暴君として知られるカラカラ帝は大規模な浴場を整備しているが、ローマに行けばその跡は今も残っており、暴君の存在は単なる記録だけでなく、絶対的な構造物とともに人々の目の前に存在している。

一方、日本の場合は宗教的基盤が全く異なり、「死んだら皆仏になる」という怨親平等思想も相まって、影の記憶は承継されにくい。建造物に関しても、基本的に木の文化であるため、長期に渡って存在することが難しく、権力者が消し去ろうと思えば、容易になかった状態にしてしまえる。

写真4　軍艦島（長崎県長崎市）

つまりこうした文明的相違が、日本にダークツーリズムの導入を難しくしていると言える。では、そもそもダークツーリズムの考え方を日本で広める意義はあるのだろうか？

ダークツーリズムの持つ価値

あらゆる事象には光と影の両面があるとしばしば言われている。ところが、一般に日本社会は影の面から目を背けがちである。

例えば、世界遺産として知られる軍艦島（端島）は、「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の一つとして登録され、日本政府からの推薦事由は基本的に、「短期間で産業革命を成し遂げて先進国になった歴史を示す遺構群」という方向性でまとめられている。

軍艦島に関しては、世界遺産登録にあたって、朝鮮半島からの労働者が「強制的」に働かされたというクレームが韓国政府によって提起され、一時期外交問題に発展した。何を「強制労働」と捉えるのかは、見解に幅があり、一義的に決めることは難しいのであるが、そもそも日本政府の登録の筋は、近代産業革命に関する負の影響をあまりにも過小評価している。

ヨーロッパの共通認識として、産業革命は必ずしもバラ色で語られるわけではない。工業化は、健康被害・殉職・環境破壊・労働運動の激化などといった影の側面を持ち、貧困地域から工業地帯へ移動した労働力が搾取されたという悲劇性は、近代を総体的に捉える上で欠かせない視点である。この件に関しては、UNESCO自体も調査に乗り出し、日本政府に対して「フルヒストリー（完全なる歴史）」を見せるように勧告を出した。

ダークツーリズムという方法論は、対象に影から接近し、その全体像を把握出来るようになるという効果を生むので、非常に強力な分析手法と言える。旅人としては、自分にとって「新しいレンズ」を手に入れたようなつもりで、このダークツーリズムという新しい旅の考え方を実践してはいかがだろうか。

写真5　原爆ドーム（広島県広島市）

実施する際の注意

さて、ダークツーリズムには意義と価値があると言っても、旅行をすべてこうした要素で構成してしまうと、精神的に消耗する。悲劇的過去と向き合ったあとは、心を解放する時間が必要である。広島の原爆ドームと隣接する資料館を見学することは大変啓発的な営みであるが、これだけでは広島の思い出が辛いものだけになってしまう。近隣の宮島に足を延ばしたり、広島名物のお好み焼きを食べたりすることで、ぜひ広島での滞在を多面的に楽しんでいただきたい。

旅の思い出が楽しさだけであると、記憶が平板になってしまい、印象も弱くなる。広島について思いを巡らせるとき、文化的伝統と被爆という悲劇、そしてそれを乗り越えてきた現代の街並みなどを複合的に鳥瞰することで、まさに「心に染みる旅」に進化していくことが期待されよう。

<参考資料>

1）井出明『ダークツーリズム　悲しみの記憶を巡る旅』幻冬舎　2018
2）井出明『悲劇の世界遺産　ダークツーリズムから見た世界』文藝春秋社　2021
3）J.John Lennon and Malcolm Foley, Dark Tourism, Continuum, 2000
4）Report on the UNESCO/ICOMOS mission to the Industrial Heritage Information Centre related to the World Heritage property 'Sites of Japan's Meiji Industrial Revolution: Iron and Steel, Ship-building and Coal Mining' (Japan)（c1484）, 7 to 9 June 2021, Code:WHC.21/44.COM/